



Title	ドイツ語に外来語としてはいった日本語について
Author(s)	長尾, 伸
Citation	明治大学教養論集, 68: 69-82
URL	http://hdl.handle.net/10291/8957
Rights	
Issue Date	1972-02-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

ドイツ語に外来語としてはいった 日本語について

長 尾 伸

I

ドイツ語に外来語 (Fremdwort) としてはいつている外国語では、ギリシア語・ラテン語が圧倒的に多いが、この両者を除くとフランス語・英語がやはり多いことは当然と言える。その他、ヨーロッパ諸国の各国語が多かれ少なかれはいつている。また最近では西ドイツではアメリカ語、東ドイツではロシア語をはじめ東ヨーロッパ諸国語が多くはいつていることが特徴的であろう。

アジア諸国では中国語・日本語・朝鮮語、その他東南アジア諸国語も広く見られるものの、数量的には欧米語に比べると絶対的に少ない。日本語の場合、アジア諸国語の中では比較的多い方だとは言えるが、ドイツ語全体の中では量的にも質的にも微々たるものに過ぎない。

ここでは1960年代に出版された次の外来語辞典から、日本語に由来するものを拾って若干の考察をしたい。

- (1) Fremdwörterbuch (VEB Bibliographisches Institut, Leipzig) 1963
- (2) Der Große Duden Bd. 5, Fremdwörterbuch (Bibliographisches Institut, Mannheim) 1966
- (3) Wilhelm Dultz: Ullstein Fremdwörterlexikon (Ullstein) 1968
- (4) A. M. Textor: Auf deutsch. Das Fremdwörterlexikon (Rowohlt) 1969

ただし、文中ではそれぞれ次の略号を使用した。

(1) FV, (2) DF, (3) UF, (4) ro

(1)と(2)は東西両ドイツの最も代表的な外来語辞典であるが、やや年次が古い
ため、それを補う意味で感覚の比較的新しく年次も60年代後半の(3)と(4)をも参
照した。

II

まず分野別に収録語を見ながら、その傾向を見ることにしたい。

1. 武士・武家政治・政治関係

Buschido (武士道), Daimio (大名), Samurai (侍), Harakiri (腹切),
Seppuku (切腹), Schogun (将軍), Schogunat (将軍職), Buschi (武士),
Ronin (浪人)と続く。

この中で Samurai は、DF では「日本の封建時代の武士階級」と「武士階
級に属する個々の武士」とに語義が分けられており、FV ではさらに年代や階
級の構成、また2本の刀を帯びることなど記されている。しかしこの分野の語
で最も知られた語は恐らく Harakiri であろう。

「武士道」には Buschido, Bushido の2つのつづり方があり、「大名」に
は Daimio, Daimyo, Daimjo の3通りがあるが、こうしたつづり方の問題に
ついては後に触れることにしたい。

Mikado (帝), Tenno (天皇) が4書のすべてに収められているが、語の説
明は前者に重い。Tenno は明治以後の語として、つまり現代政治の語として
はいったものであろう。比較的新しいものとして Genro (元老) があり、行政
単位として Ken (県) があげられる。

この他、1書にのみ見られるものとして、Buke (武家, FV), Bakufu (幕
府, FV), Kuge (公家, FV), Kikumon (菊紋, DF) などが加わる。

2. 武道・スポーツ

Jiu-Jitsu (柔術), Judo (柔道), Judoka (柔道家), Kendo (剣道), Karate
(唐手)。いずれも説明はくわしい。「相撲」が Sumoringkampf の形で FV に
のみ見られる。

3. 宗教

Zen (禅), Bonze (坊主), Bosatsu (菩薩), Schintoismus (神道), Torii (鳥居)。

ここでは何と言っても Zen が重要語であり, DF, ro ではかなりの行数をこれにあてている。DF では「シナの Tschan (禅) から発展した仏教の日本の流派。冥想によって生き生きした生命力と, 極度の自制と, それによって仏との合一とをはかろうとする」と書かれている。またこの語はドイツ式に [tsen] と発音されることを恐れて, 4 書とも発音記号が付されている。

Bonze [ˈbɔnt͡sə] については, 第一義の「坊主」の他に, この語がポルトガル語→フランス語を経てドイツ語にはいる過程で獲得したと思われる侮蔑的な第二義が 4 書ともに見られる。すなわち, たとえば ro によれば「職務または党派において, うぬぼれ高ぶった人物」とあり, そしてその派生語として Bonzokratie 「ボス支配」があげられている。

宗教関係では先に記した以外に, DF にはまだかなりの数が見出される。

仏教: Bonfest (お盆), Dschodo (浄土), Rakan (羅漢) のほか, Nitschirensekte (日蓮宗), Schinsekte (真宗)。

神道: Kami (神), Kannuschi (神主), Norito (祝詞)。

キリスト教: Kyodan (教団, FV)。

4. 茶花道

Chanoyu (茶の湯), Yaki (焼), Aritaporzellan (有田焼), Imariporzellan (伊万里焼), Chaire (茶入), Temmoku (天目)。かなり特殊な語さえ見られる。また Chanoyu (Tschanoju) の同義語として, Sado, Chado (茶道) も FV には収められている。

花では Ikebana (生花, UF), Ikenobo (池の坊, FV) のみが見られる。

5. 芸能関係

No, No-Spiel (能), No-Maske (能面), Kabuki (歌舞伎); Samisen, Schamisen (三味線), Koto (琴), Biwa (琵琶), Gagaku (雅楽) など一応常識的で, Joruri (浄瑠璃) は DF にのみある。FV に Keikin とあるのは「携琴」

のことだろうか。「日本の四絃琴」としか説明がないので詳しくはわからない。

6. 工芸・趣味

Kakemono (掛物), Makimono (巻物), Inro (印籠), Netsuke (根付), Tsuba (鐔), Makie (蒔絵), Ogi (扇), Japanpapier (日本紙), Kogo (香合); Go (碁), Igo (囲碁), Riksha (人力車), Geisha (芸者) などかなり豊富で多種にわたっている。

Makie には Takamakie (高蒔絵, FV) さえあり、また Nashiji (梨地, FV), Tsuishu (堆朱, FV), Surimono (摺物, DF) もみられる。

ドイツでは碁は盛んであるから、さすがに Go は 4 書すべてにあるほか、Igo の形でも DF, FV に収められている。しかし、Goischi, Goban [g] は見られない。Riksha は Geisha とともに極めて知られた語であるが、Jinrikischa は FV に見られるのみである。ほかに Kago (駕籠, UF), Bonsai (盆栽, FV) がある。

7. 衣服・織物

Kimono (着物), Obi (帯) に続く語が Japon [ʒa'põ:i] である。フランス式の発音であり、フランス語を経由して来た語だが、語義の方は DF には「日本の絹で作られたしなやかな琥珀織の織物」、FV には「日本の軽やかな生糸」とわかれているが、Habutai (羽二重, DF) と同義で使われるようである。⁽¹⁾

8. 文学・歴史関係

Katakana (片仮名), Hiragana (平仮名) があるほかは、次のものが DF に 1 例ずつ出る。Haikai (俳諧), Haiku (俳句), Hokku (発句), Tanka (短歌); Kodschiki (古事記), Nihongi (日本紀), Engischiki (延喜式)。また分類としてここへ入れるのは少し不自然かも知れないが、4 書のすべてに見られるものに Banzai! (Bansai!) (万歳) という唱え語がある。

9. 動植物名・専門語

動物では Sikahirsch (鹿, *Cervus nippon*) が複合語として出るだけであるが、植物はかなりの数にのぼる。Ginkgo (銀杏, *Ginkgo biloba*), Tsuga (樺, *Tsuga canadensis*), Aucuba (青木, *Aucuba japonica*), Fatsia (八手,

Fatsia japonica), Kakibaum (柿, *Diospyros kaki*) などである。

Ginkgo (DF, FV, UF) は, Ginkjo (DF, FV), Ginkgo (FV) の形でも見られるが, DF では Ginkgo は「(植物学の) 専門語としてはこのつづり方を使うが, Ginkjoの方が正しい」とし, FV では Ginkgo, Ginkgo を並置させた上で Ginkjo をより正しいものとしている⁽³⁾。しかし Ginkgo が最も一般的な形であって, UF ではこの形しか収めていない。なお, 銀杏の学名は *Ginkgo biloba* Linn. であり, リンネの命名による。

Ginkgo は銀杏を「イチョウ」(和名) または「ギンナン」(唐音) と読まず, 「ギンキョウ」と読んだものをローマ字化したものであるから, Ginkgo というつづり方はまことに不自然であり, しかもこのつづり方で [ʔgɲko] と発音させるのだから, かなりの無理がある。Ginkgo というつづり方はこの発音に合わせてつづりの方を改めた結果生まれたものと推測される。Ginkjo の発音は [ʔgɲkjo] であり, 何の無理もないばかりか, 先の「ギンキョウ」に一致する。

三輪卓爾氏によれば, Ginkgo という語が生まれた由来を早く論じたのは新村出博士であり⁽⁵⁾, その後大正13年(1924)に太田正雄博士(木下奎太郎)は「長崎出島の商館付医師だったケンプェルの *Amoenitatum Exoticarum* (1712・『異国奇事』)の中にイチョウの図を見出し, その説明に「銀杏」の漢字と「Ginkgo」の横文字があることから, Ginkyo の y を g に誤ったのが後世まで残ったものとされた⁽⁶⁾」という。また『標準原色図鑑全集』によれば「Ginkgo は Ginkyo または Ginkjo の誤りだったという, すなわち y が g にまちがえられたらしい⁽⁷⁾」とある。しかし, 先にあげた限りの辞典(注を含む)には, Ginkjo はあっても, Ginkyo は現われない。『牧野新日本植物図鑑』では「Kaempfer が *Amoenitatum Exoticarum* に Ginkjo とすべきを Ginkgo と誤植されたのに由る。近年 kgo は kyo の誤りという外国学者の見方は誤っている⁽⁸⁾」としているので, Ginkjo が誤まって Ginkgo となり, それがリンネに受けつがれ, 学名として固定したものであると思われる。学名の中にはつづりが間違っていたり, ラテン語の性を間違えたりしてつけられたものがかなり多くあるということであるから, *Ginkgo* という学名そのものを訂正すべきかどうかは, 別の

問題として切り離して良いと思われるが、ドイツ語のつづり方をいう場合には DF などの扱いが妥当だろうと思われる。

Aucuba の Aucu は「アオキ」にあたる部分であろうが、-ba はどこから来たものか。Fatsia はヤツデの「八」に由来するという⁽⁹⁾。すっかりラテン語化して一見由来が判らないが、Fatsi が「ハチ」であると言われてみればなる程というわけである。ただし、-a は単なる女性名詞の語尾と受けとって良いのだろうか。

専門語およびそれに準ずるものの中では第一に Tsunami (津波) がある。この語は日本古来の用語が地球物理学の業績とともに輸出されたものであろう。次に触れておきたい語として Taifun (台風) がある。4 書ともこの語はその由来をシナ語とし、DF では「シナ語→英語→ドイツ語」という経路を示している。しかし、大谷東平著『暴風雨』には次のように書かれてある。「この文字 (颱) を気象学でいふ東亜の熱帯暴風雨と結びつけて、その概念を明かにし颱風と命名したのは前中央気象台長岡田博士(元中央気象台長岡田武松博士)である⁽¹⁰⁾。」すなわち、中国語を基礎にふまえながらも学術用語として定義づけされた語としては国籍は日本のようである。ただし、そうだからと言って上記の伝来の経路を改めて、たとえば「シナ語→日本語→英語→ドイツ語」とするわけにはいかない。同じ大谷東平は「中国語の「颱」の字を取り入れ、英語のタイフーンの韻をふんで、「颱風」と名付けたのは⁽¹¹⁾「至つて巧妙な名付けかたである⁽¹²⁾」と書いていて、既に少なくとも明治末年には英語の typhoon という語は存在していたからである。従って「シナ語→英語→ドイツ語」の経路の全過程が終わってから、日本語が介入したと言うべきであろうか。

このほか 1 例ずつではあるが、Hakushi (博士, UF), Sodoku (鼠毒=〔医〕鼠咬症, DF), Kakke (脚気, DF), Moxa (艾, FV) がある。Sodoku, Kakke は日本人の医学的業績とともにいった語であるが、「脚気」は Kakke より Beriberi (シンハリ語に由来する) の方が一般的のようである。Moxa には語尾を変えた Moxe の形もあり、さらにこれから Moxibustie, Moxibustion (ともに FV) なる造語をして「お灸」の意としている。

10. その他

Sake (酒), Soja[bohne] (大豆), Tofu (豆腐); Kamikaze (神風), Nippon (日本), Yen (円), Sen (銭)。

Sake が世界に冠たるアルコール飲料であることは良いが、問題は、Soja, Sojabohne である。DF は「東南アジアのマメ科植物。蛋白と脂肪をふくむ種子によって貴重な有用植物」と述べている。したがって Soja は「醤油」の音を写した語であるにもかかわらず、語義は「大豆」(植物および豆そのもの)とされている。Sojasauce (醤油) は4書とも見当らない。

日本では「神風特攻隊」はもう過去のことばとなってしまったのに、Kamikaze は DF, FV はもちろん、最も現代的な ro にさえ詳しい説明が付されている。ro によれば「^レ神の風、の意。第2次世界大戦中の日本の攻撃戦術：神風機の操縦士 (Kamikazepilot) は爆装した飛行機を直接目標にぶっつけて、爆発のとき生命を失う」とされている。

Nippon が現われるのは UF, ro に過ぎない。最も収録語の多い DF (1966) や FV (1963) になく、収録語が少なくまたその選択がかなり現代的な UF (1968), ro (1969) にのみ見られるのには理由があろう。第18回オリンピック夏季大会が東京で開かれたのは1964年であった。日本はこのとき国名の国際的な正式呼称を Japan ではなく、Nippon と定めて使用したのだった。これが新しい2書に収録される理由となったと考えてよいであろう。もっとも4書とも Japan の派生語はあっても——Japaner(FV), Japanolog[e] (DF, FV, UF), Japanologie (DF, FV, UF)——, Japan そのものは、国名・地名・人名などの固有名詞はのせない原則に従って収められていないので、同じ原則から言えば Nippon も落ちて当然なわけで、DF, FV がないこと自体を問題にはできないかも知れない。もしそうなら、むしろ UF, ro にあえて収録したことに意味があることになる。いずれにせよ、Nippon は新しい外来語としてその地位を確保したことになる。

経済大国日本を知るものは Yen を知らねばならない。4書に Yen があるのは当然のことだが、Sen が3書 (DF, FV, UF) に見られ、Rin (厘, FV)

さえもが——ついでに言えば Momme (匆, DF) も——見られる。

以上全般的に見て、次のようなことが特徴としてあげられるだろう。

- (1) 武士・武道・宗教・遊芸・工芸・衣服など、日本古来の伝統的文化に係わる単語が圧倒的に多いこと。
- (2) 明治以後に背景をもつ語が少ないこと。
- (3) 特に生活語は極めてとぼしいこと。

Ⅲ

品詞別に見ると、ほとんどすべてが名詞であって、形容詞としてわずかに1語 schintoistisch (DF, FV) があるだけであり、動詞はついに1語もない。また Banzai! (Bansai!) は4書とも感嘆符をつけて、感嘆詞として収録されている。この傾向はⅡの末尾にあげた特徴を考えれば、容易にうなずけることである。要するに遠い異国の珍しい文物を、その名称とともに受け入れた結果なのである。

しかし、60年安保のとき全世界にその名をとどろかせた Zengakuren (発音は [ʼtsɛngakurɛn] だった) も、映画 Raschomon もこれらの辞書にははいっていない。日航機の乗っ取り事件の Sekigunha もやはり今後収録されることはないであろう。これは辞書の性格からしてむしろ当然のことかも知れない。つまり何をもって定着した語と判断するか、という問題である。流行語は収録しないという立場をとれば、勢い保守的な態度をとることになるからである。

だが、Banzai! はあるのに Sayonara! がないのはいかにも歯がゆい。ここでは非生活語としての性格が表われたものではあるまいか。ただし、この種の生活語は今後漸増することはまず間違いないところであろう。

Ⅳ

さて、日本語をドイツ語文字化する、すなわちローマ字化する際におこる若干の問題をみることにする。

日本語をローマ字で書き表わす場合、訓令式・ヘボン式・日本式の3つの方式が行なわれている。現在小学校では訓令式を教えている（ただし、止むを得ないときはヘボン式を許容することを含めて）が、最も広く用いられているのはヘボン式（正確にはヘボン式を修正した修正ヘボン式）である。しかしこの方式は英語の発音に基づいたつづり方であるから、ドイツ語の発音とは合わない面が他の方式よりも多く出るのは当然のことである。他の方式を用いたとしても、やはり問題点が残る。

たとえば「万歳」は *Banzai* というつづり方を4書とも収めているが、DFとFVは *Bansai* をも収め、DFは *Banzai* をより良いものとし、FVは *Bansai* を上位に置いている（ただしFVのここでの書き方は *Bansai* と *Banzai* をただアルファベット順に置いただけで、どちらをより良いとするものではないようである）。*Banzai* というつづりをドイツ語式発音で発音すれば [ˈbantsai] となってしまうと、[ˈbanzai] とはならない。ドイツ人に [ˈbanzai]（むしろ望まれるのは [banˈzai] だが）と発音させるためには *Bansai* と書いた方が良いわけである。しかし、これではいわゆるローマ字式ではないから、ドイツ人以外には日本人を含めて [ˈbansai] と読まれる結果となる。つまり *Banzai* と *Bansai* の両者に一長一短があり、つづり方も両方にゆれる結果を生んだのである。これが *Zen* となると、このつづり方はかなり国際的に固定したものと言えるから、[tsen] と読まれる危険を持っていても *Sen* と書き変えるわけにはいかない（*Sen* には「銭」がある）。*Zen* とつづっておいて、[zen] と読むのだと注意するよりほかない。*Kamikaze* についても同じことが言えるし、*Samurai* の場合には逆のことが言える。だから、酒 (*Sake*) はドイツへ渡れば清酒ではなくて濁酒になってしまう、などとの冗談が出ることにもなる。

武士道の場合にも *Buschido* と *Bushido* の両様がある。「シ」は訓令式では *si* だが、このつづり方は *Sikahirsch* の1例があるだけで、他はすべてヘボン式の *shi* とドイツ式とも言える *sch* があらわれる（例：*Shintoismus*, *Schintoismus*）。「シャ」「シ⁽¹³⁾ョ」についても同様であって、訓令式の *sya*, *syo* は見られず、*sha*, *scha*（例：*Geisha*, *Rikscha*）, *sho*, *scho*（例：*Shogun*, *Schogun*）

の両様が見られる。しかし、これら全般にへボン式よりドイツ式の方が優勢である。

「ジ」「ジュ」「ジ⁽¹⁴⁾」については、訓令式 *zi, zyu, zyo* の用例はなく、へボン式 *ji, ju, jo* と、ドイツ式の特有な *dschi,*—⁽¹⁵⁾ *dscho* とが見られる。*Kojiki, Kodschiki; Judo; Joruri, Dschodo* などである。ただし、柔道関係については他に見られない特別の現象がある。「柔道」「柔道家」は *Judo, Judoka* として既につづり方が固定していると言えるのに対し、「柔術」の方は、*Jiu-*⁽¹⁶⁾*Jitsu, Dschiu-Dschitsu* の両様がある。ここで特別の現象と言うのは「ジュウ」という発音を、*Judo* などでは長音を無視し、*Jiu-Jitsu* などでは長音をつづりに表わしている点である。*Judo* がそうであるように、一般には長音を表記する習慣はないのであるから、*jiu, dschiu* は異例の書き方であると言える。(なお *Jiu-Jitsu* の *Jitsu* の部分については後に触れる)。

「チャ」についても訓令式の *tya* はなく、へボン式の *cha*、ドイツ式 *tscha* の両様となる。つまり *Chanoyu* と *Tschanoju* のように。ここでへボン式の *Chanoyu* の「湯」の部分が *yu* であり、ドイツ式のそれが *ju* であることにも触れなければならない。つまり「ヤ」「ユ⁽¹⁷⁾」は *ya, yu* と *ja, ju* があるわけであり、前者がへボン式、後者がドイツ式であって、先の用例のように一般にへボン式とドイツ式が混じり合うことがないのは注目してよい。(ただ *Jinrikscha* では両式が混じっている)。

上記に関連すれば、「蒔絵」の表記は *Makie* (DF) と *Makiye* (FV, UF) の二様に分かれる。*Makiye* の方は歴史的かなづかいの「まきゑ」と一致する。しかしここでは *Makije* のつづり方は見られず、*Makiye* をとっている FV でも、「高蒔絵」の場合は *Takamakie* となっていて一貫していない。「円」には *Yen* と *Jen* の両様を示されていて、どれも *Yen* をより良いものとしている。ここでは *Makie* 式の *En* というつづり方はないし、またそれでは国際的に通用しないと思われる。しかしドイツ式の *Jen* に対する指向も相当強いことが感じられる。

「大名」の場合は明らかに混乱していて、*Daimio, Daimyo, Daimjo* の3種

が見られるが、ここでは **Daimyo** (訓令式・ヘボン式も同じ) が優勢である。なお付言すれば、先の「銀杏」の **Ginkjo** はドイツ式というわけである。

ドイツ語で [ai] という発音をもつつづり方には、**ai** (**ay**), **ei** (**ey**) がある。ローマ字では訓令式・ヘボン式・日本式のどの方式でも **ai** で表わすから、この場合 **ai** を使っておけば一応問題はないわけである。実際、**Samurai**, **Banzai** ... と **ai** が使われている。その中でただ1つ「台風」の場合は、**Taifun** が4書に出ているほかに **Teifun** が **FV** に見られる。ただし、**FV** でも **Taifun** の方をより良いものと見ているようである。「アイ」を **ei** で表わすことが一般化すると、逆に問題が起こることになる。たとえば **Keikin** は「ケイキン」なのか「カイキン」なのか混乱することになる。この **Keikin** (**FV**) の場合には発音記号が付してあって、[**'ke:kin**] としてある。つまり、「カイ」ではないことを明らかにしてある。

さて、ここで興味があるのは発音が [**'ke:kin**] であって [**'keikin**] となっていないこと、つまり「ケイキン」とせず「ケーキン」と示してあることである。現代の日本語では——特に東京地域語では——複母音は長母音になる傾向が強いから、それをそのまま示したものである。「芸者」のつづり方は **Geisha** と安定しているが、これの発音は [**'ge:ʃa**] (**DF**, **FV**, **ro**) と [**'geiʃa**] (**UF**) にわかれる。これが「羽二重」となると、現代日本語ではおおむね「ハブタエ(〜)」とは発音せず、「ハブタイ」と発音していると思われるが、この語は **Habutai** というつづり、つまり発音通りのつづり方をとっている。

「力車」という語は日本では使わない日本語だが、この「リキシャ」のつづり方は4書とも **Rikscha** であって、**Rikischa** ではない。つまり無音化してしまった **i** をつづりの上でも省いた書き方である。母音の無音化は現代日本語ではかなり見られる——特に東京地域語では著しい——現象である。**Rikscha** の場合は英語の **ricksha** を一旦経て来たもので、これは生きた口語からはいったものであろう。ただし「人力車」になると **Jinrikischa**, **Jinrikscha** (ともに **FV**) の両様が見られる。同じようなことは「柔術」の場合にも現われる。この語は現代の日本ではほとんど使われない語ではあるが、この発音は「ジュウジュ

ツ」か「ジュウジツ」か。少なくとも現代の東京地域では「ジュウジツ」であることは間違いないところである。さて、この語は Jiu-Jitsu の形で 4 書に出ており、Dschiu-Dschitsu (DF, FV) も見られることは先にも触れたが、いずれにせよ「ジュウジツ」の音を写したものとなっている。ほかに FV に Jujutsu が見られるのがただ 1 つの別例である。

Moxa のつづり方はヘボン式・訓令式・日本式・ドイツ式のどれにも属さない。この語は日本語からフランス語・英語・スペイン語などを経てドイツ語にはいったと示されているが、この x を使うつづり方は (Daimio とともに) キリシタンのそれを思わせる。その頃、日本から出た語ではあるまいか。それはともかく、ここでも母音 u が脱落していて、それは現代の日本語では無音化された母音である。

「人力車」を表わす語として Rikscha と Jinrikischa (Jinrikischa) があったが、前者は後者の Jin- の部分が省略されたか、脱落したものであることは明らかである。これとは異なって、Haikai, Haiku, Hokku の場合は DF では全く同義の語、すなわち「俳句」の意として書かれている。「俳諧」「俳句」「発句」の 3 つの日本語の意味上の重なり合い、あるいはずれは、総ページ数 771 ページの中辞典では述べ切れなかったというよりも、すべて「俳句」の意でと⁽¹⁸⁾らえられているようである。Chanoyu (Tschanoju), Chado [ʼtʃado], Sado [ʼsado] の 3 語は同義語として出ているが、これは日本語でもやはり同義である。ただ日本語の「茶道」が「チャドウ」「サドウ」とゆれているままに、両形とも見出されることを指摘しておきたい。同様のことは「三味線」にも見られ、Samisen, Shamisen, Schamisen の 3 形があり、前二者が優勢である。このこととはやや異なるが、「片仮名」「平仮名」はそのまま Katakana, Hiragana として出るとは当然と言えば当然だが、-kana, -gana の部分が同義であることは、つづり字だけを見る人には容易には判らないことではあるまいか。

V

Judo について Judoka, Buschi について Buschido というような複合語が

ある。しかし、ここでは Judo に *-ka* という語をつけて複合語をつくったというような意識は薄いのではあるまいか。Judoka も Buschido も単一の語として、あるいはせいぜい Judo や Buschi と並べて意識されているのではないだろうか。これらに比べると、Japanpapier, Nitschirensekte, Kakibaum, Arita-porzellan などは、一部をドイツ語（ここでは外来語を含む）の単語に置きかえているだけに、複合語であることは明瞭であり、またそのことが意識されるであろう。No-Maske となればさらに一層明瞭である。

一方、日本語の方は複合語ではないのに、語義を明らかにさせるためにドイツ語の単語を付加して複合語をつくったものもある。No-Spiel[e], Sumoring-kampf, Bonfest, Sikahirsch などのたぐいである。

また、後綴(Suffix)を付して派生語としたものもある。Schintoismus, schintoistisch, Schogunat などがそれである。

注

- (1) Brockhaus Enzyklopädie Bd. 9, 1970 による。
- (2) DF のほか、Der Große Duden Bd. 1, Rechtschreibung (Bibliographisches Institut, Mannheim) 1967 および G. Wahrig: Das Große Deutsche Wörterbuch (Bertelsmann) 1966 も同じ見解をとっている。
- (3) Ginkgo と Gingko を並置させている点では Der Große Duden, Rechtschreibung (VEB Bibliographisches Institut, Leipzig) 1967 および Der Sprach-Brockhaus 1953 も同様であるが、これらは Ginkjo はのせていない。
- (4) R. Pekrun: Das deutsche Wort (Keyser) 1967 も同様である。また ro は3形すべてを欠き、L. Mackensen: Deutsches Wörterbuch (Pfahl) 1962 は Ginkgo のみを収めている。つまり本文および注を含めて Ginkgo をあげていないのは Mackensen のみである（ただし ro を除く）。
- (5) 三輪卓爾「旧姓・日本語(二)」(『言語生活』第221号 筑摩書房) 87ページ補注参照。
- (6) 同上 83ページ参照。
- (7) 岡本省吾著『標準原色図鑑全集』第8巻 保育社 昭和41年 1ページ参照。
- (8) 牧野富太郎著『牧野新日本植物図鑑』北隆館 昭和41年第14版 巻末「学名解説」56~57ページ参照。
- (9) 同上 巻末「学名解説」55ページなど。
- (10) 大谷東平著『暴風雨』岩波書店 昭和15年 47ページ参照。
- (11) 大谷東平著『台風の話』岩波書店 昭和30年 59ページ参照。

- (12) 注 (10) の書 48ページ参照。
- (13) 「シュ」については用例を欠く。
- (14) 「ジャ」については用例を欠く。
- (15) 「ジュ」については dschu の用例を欠く。
- (16) Jujutsu (FV) も1例あるが「Jiu-Jitsu を参照せよ」とあって副次的な位置しかもたない。
- (17) 「ヨ」については用例を欠く。
- (18) Brockhaus Enzyklopädie には Haiku はあるが, Haikai, Hokku はない。